

## ■本を捨てない人たち

どうしても本が捨てられないと嘆く人がいる一方で、あまり悩まず、どちらかといえど気楽に本を捨ててしまう者もいる。

私は後者である。捨てるというか、本を売ったり、人にやったり、ビニール紐でしばってゴミ捨て場においてきたりすることに、さして痛みを感じない。気がつくといつのまにか、そういう味気ない人間になっていた。

いや、これはウソだな。

私がこうした人間（もしくは非人間）となりおおせたについては、いつのまにかではなく、それなりに明白なきっかけがある。二十代なかばに演劇にのめりこみ、とたんに食えなくなって、生まれてはじめて本を大量に処分した。むかし中公新書からだした『新・本とつきあう法』という本に、そのことに触れた箇所があるので引用しておこう。

—子どものころからの蔵書が四〇〇〇冊ほどもあったろうか。そのうちのどうしても手放す覚悟がつかないものを数十冊のこして、あとは根こそぎ早稲田の古本屋に売り払ってしまったのである。岩波の古典文学大系や、真善美社刊の戦後文学の初版本や、ほそぼそと買いあつめてきた内外の演劇書などがオート三輪に山積みされて消えてゆき、その後しばらくのあいだは頭が空っぽになったようで、なにも考えることができなかった。だが、やがてそれにも慣れて、以来、本をもち、本をためることへの執着心がしだいに薄れていって今日にいたる。

これまた本当をいえば、のこしたのは「どうしても手放す覚悟がつかないもの」ではなかった。最初のうちは「いいからぜんぶ持ってってよ」とキッパリ対応していたのに、最後の最後になって、

「あっ、この一段だけ別にしといてください」

と目のまえの本棚一段分を発作的にとりのけてしまったのだ。

なさけない。うずたかく積み上げた本の山をシートでおおって遠ざかるオート三輪の尻を見ながら、なんたる未練かと自嘲した。売り値はたしか七万円ほど。いまでいえば二十万ぐらい？ 三十万？ とにかくそれで辛うじて何か月か食いつないだんじゃなかったっけ。

ともあれこの精神的な外科手術によって、私は「自分の部屋は本の収蔵庫ではなく通過地点なのだ」と思い定める」ようになった—と『新・本とつきあう法』でそう書いたときの私が四十九歳である。その後も本への執着心はよみがえることなく、パサパサの非人間のまま、あっけなく年老いた。きっとこの状態のまま死んでゆくことになるのだろう。

\*

私のような人間の対極に、本を捨てるのを頑として拒み、文字どおり本の山に埋もれて死んでいった友人が何人かいる。なかでおなじ世代にしぼって二人だけあげると、

まず草森紳一。

かれを友人と呼んでいいのかどうか、ちょっと迷うが、まあいいとしよう。一九七〇年代にかれの『ナンセンスの練習』や『円の冒険』の刊行に編集側の一員としてかかわったから、ある期間、かなり近しい知人のひとりだったことはまちがいない。

その草森氏が門前仲町の2DKの自室で心不全で急死したのが二〇〇八年である。私とおなじ一九三八年生まれで、ちょうど七十歳になったばかりだった。

ただし、もう四半世紀もつきあいが絶えていたから、くわしいことは知らない。「部屋には所せましと本が積み重ねられており、遺体はその合間に横たわっていた。あまりの本の多さに、安否を確認しに訪れた編集者でさえ、初日は姿を見つけることができなかった」というようなことは新聞の追悼記事（これは読売新聞のもの）ではじめて知った。あとで聞いた話では、その数日まえに亡くなっていたらしい。

かれの死を知っても、とくにしんみりとはしなかった。なにせこっちは甲羅にカビのはえたくそジジイだからね。しんみりするかわりに笑った。

—ハッハッハ、草森さん、やっぱりこうなったか。

すでに一九八四年、草森紳一は雑誌『室内』によせた「本の精霊」というエッセイに、「本は、売ったり棄てたりしない覚悟をきめたので、予想されるのは、ひたすらに増えていくことのみである。（略）やけくそといえ、もうやけくそなのである」としてしている。やけくそであれなんであれ、本だけが黙々と増えてゆく2DK暮らしの終幕がいずれどんな性質のものになるか、その程度のことはとうに予想がついていたのだろう。

「こうなると、もうマンガである」（同）

その覚悟のほどは私のような遠くの友人にもそれなりの深さで伝わっていた。マンガね。ならばこちらも笑うしかないよ。いまさら感動したり肅然としたりするたぐいの話ではない。

\*

もうひとり草森紳一より十年早く、一九九八年に六十一歳で死んだ友人に久保覚がいる。やはり心筋梗塞による突然死だった。

久保覚一。

一九六〇年代から七〇年代にかけて、現代思潮社やせりか書房といった新しい出版社から、ブルトンの『シュルレアリスム宣言』や山口昌男の『人類学的思考』やバフチンの『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』などの本を、つぎつぎに世に送りだした硬派・独立系の編集者である。

いまに名高い學藝書林の『全集・現代文学の発見』も実質的には久保覚の編集だったし、かれが講談社版『花田清輝全集』のために作成した型破りの書誌を谷沢永一が「個人書誌の最高峰」（『日本近代書誌学細見』）と絶賛していたことは、ご存じの方もおいでだろう。

九月某日、知らせをうけて荻窪の小さな借家に駆けつけると、八畳ほどの居間の壁に押しつけるようにして設置された既製のベッドに、久保さんの遺骸（かなりの肥大漢だった）が横たわっていた。

ベッドをはさんで壁の反対側には、おびただしい量の本が天井まで急な斜面をなし

て何層にも積み上げられている。かれのでかい髭面に別れを告げるにも、ベッドと本の山とのわずかな隙間を、からだを斜めにしてそろそろと移動してゆくしかない。うっかり雑にうごくとも本の崖がドドッと崩れてしまいそう。だいいちかれが眠るベッド自体が、頑丈な本を何百冊か積んだ上に板を一枚おいただけのしろものなのだ。

久保さんも、かつて斯道文庫（慶應大学附属の和書漢籍ライブラリー）に籍をおいていたことのある草森氏も、ともに偏屈な市井の書誌学者という一面を持っていた。それだけにしつこい。そのしつこさで生涯かけてあつめた本を、かれらはいったい、どれほどの量もっていたのだろう。

草森氏の場合、門前仲町の自室だけで約三万二千冊。ほかに帯広の生家の庭に建てた書庫にもほぼ同数の本が収められていたというから、合わせて六万冊強といったあたりか。

久保さんも自宅のそばに書斎兼書庫として1DKの部屋を借りていた。正確な数字は不明だが、ざっと見て、自宅に三万冊、準備中の著作（「半島の舞姫」崔承喜の伝記など）のための諸資料を中心に仕事場に一万冊、合計でおおよそ四万冊ていど。

—おやおや、金もないのに、なんでそこまでやるのさ。

そう考えると、やはり笑うしかないのである。

\*

死んだ友人の蔵書をあげつらう以上、じぶんのことにも触れておくべきだろう。

私の蔵書は少ないですよ。せいぜい六千冊か七千冊ほど。久保や草森はもちろん、ふつうの職業的インテリ（大学教師、物書き、編集者など）にくらべても、かなり少ないほうなのではないか。

冒頭でのべた二十代なかばの大整理でゼロ同然になった蔵書が、それから十年ほどでふたたび四千冊をこえ、その後は多くて六千冊というあたりで落ち着いていた。

とくに四十代や五十代前半までは、まだひとり身で三年に一度は引っ越しをしていたから、そのつど思い切った処分をせまられた。不要な本を部屋のすみに積んでおいて、年に何度か、近所の古本屋に持っていってもらおうというような堅実な習慣もできていたしね。

ところが五十代後半に結婚して家をかまえると、この新陳代謝システムにガタが生じ、あっというまに蔵書が七千冊をこえてしまった。そこで三年まえの春、それまで九年間つとめた大学をやめたのを機に、まずとりかかったのが本の減量作戦である。

のこされた時間は少ない。心身の急速なおとろえを勘定に入れれば、まともに本が読めるのはあと十年。どう長く見つもっても二十年だろう。私の本とのつきあい方は久保覚や草森紳一とはちがう。もう読めないとわかっている本の山に埋もれて死ぬのはいやだ。もちろん本のベッドの上で死んでいくのもごめん。

そこで減量ということになる。

とりあえず一年に二百冊読むとして、計算上は十年で二千冊、二十年で四千冊。でも実感としてはちがう。十年だろうと二十年だろうと、まともに読めるのは一千冊がせいぜい。しかも半分以上は新しい本になるだろうから、最終的には手持ちの本を現在の七千から六千ひいて一千冊、せめてその程度にまで減らしておきたい。

ただし六千冊となるといちどには減らせない。心理的にも生理的にも古稀をすぎた

老人には負担が大きすぎる。

そこでとりあえず手持ちの本を、①すぐ捨てる本、②つぎに捨てる本、③つぎのつぎに捨てる本、④死ぬまで捨てない本、の四種に分けて、一年ぐらいかけてゆっくり減量していこうと決めたのだが、いやはや、そのあとどうなったかは次回で一。